

令和元年度

一日一句365日

太田 康直さん

十二月

- 1日 華やかなイルミネーション師走入り
- 2日 通夜の席どんぶり鉢に煮大根
- 3日 はっくしょん何処かで誰かが誹ってる
- 4日 枯蓮や矢折れ刀尽き泥に伏す
- 5日 数多たび咳き込みその都度飴しゃぶる
- 6日 とろとろの味煮崩れし蕪かな
- 7日 納豆の糸引く夕餉葱刻む
- 8日 ジョンレノン忌日めぐり日に日に痩せて行き
- 9日 漱石忌前夜の寝ずの番百聞氏〔注1〕
- 10日 鮫鱈の吊るし切らるる面構へ
- 11日 造物主の創り損ねし海鼠かな
- 12日 おでん煮ゆ人の情けにほだされて
- 13日 旧姓の飛び交ふ里の忘年会
- 14日 囲炉裏端小言幸兵衛になり果てし
- 15日 でらうまや名古屋育ちの味噌煮込み
- 16日 夜の寒柝銃後の少年勤め上げ〔注2〕
- 17日 裏表交互に炙る焚き火かな
- 18日 街娼が得意客なりし夜鷹蕎麦
- 19日 鼻や見たくもないその面構へ
- 20日 ぼけ老人炬燵弁慶になり果てし
- 21日 乗り出して蒲団を屋根に干してをり
- 22日 鴨一羽ぬかりなく見張り番勤め
- 23日 心地よき暖房車につひうとうと
- 24日 手術痕撫でつつ浸る柚子湯かな
- 25日 羽根生えてお札飛び去る年の暮
- 26日 熱爛や貧乏徳利すぐ空に
- 27日 恒例となりし年末第九聴く
- 28日 イヤリング慌てて外す鱈起こし
- 29日 日記閉づ日ごと月ごと字を忘れ
- 30日 購（あがな）ひし百円ショップの注連飾る
- 31日 良きことのほどほどありし年惜しむ

注1：漱石の臨終に備えての措置

注2：火の用心、戸締り用心と声を上げながら拍子木お叩いて、夜回りする少年の役